

「すべての血」への回帰

—ホセ・マリーア・アルゲダスを 二一世紀に読み継ぐために¹—

後藤 雄介

はじめに

2011年は、南米ペルーの作家・人類学者であるホセ・マリーア・アルゲダス（José María Arguedas, 1911–1969年）の生誕百周年の記念すべき年であった²。

ペルーでは1963年以来、各年に対して公式名称（Nombre Oficial de los Años Peruanos）を付与してきているが³、2011年は紆余曲折を経て、残念ながら「アルゲダス生誕百周年」ではなく、「世界マチュピチュ発見百周年」とされた。とはいえ、学術的な国際シンポジウムから大衆的イベントに至るまで、アルゲダスをめぐっては数々の行事が一年を通じて営まれた。その模様は、2010年にペルー建国史上初のノーベル賞（文学賞）受賞者となったばかりであったマリオ・バルガス・ジョサ以上に、アルゲダスがペルーの「国民的作家」であることを印象づけるものであった。

かつてインカ帝国の中枢であったペルーは、ラテンアメリカ諸国のなかでも先住民（indígena）人口がいまでも多く、北米のメキシコや同じくアンデス地域に位置するボリビア・エクアドルと並んで、先住民の文化擁護およびその社会経済的復権を問う「インディヘニスモ」（indigenismo, 先住民主義）の思想・運動潮流が盛んであった。アルゲダスは一般にこのインディヘニスモを代表する人物として知られている。

筆者はこれまでに、アルゲダスを単なるインディヘニスモの文学者と位置づけるのではなく、先住民社会と西欧近代社会とが歴史のなかでさまざまな矛盾を孕みつつも不可逆的に融合してゆく流れ、すなわち「メスティサヘ」（mestizaje, 混血）のプロセスとその意義について考察・展望する思想家としてとらえようとしてきた。しかしながら、アルゲダスの死（1969年）から半世紀近い時間が過ぎ、東西冷戦体制もはるか昔のこととなってグローバル化する世界ではネオリベラル経済が席捲し、ペルーでは二〇年に及ぶ政治暴力の時代を経て先住民をめぐる社会状況もさらに変貌するなか、いわばアルゲダスの「知らない時代」が進行している。そのような状況下で、単なる「懐古」に留まることなく、アルゲダスの思想に今後も注目し続けていくとすれば、その意義は

どこに見いだすべきであろうか。

本稿は、まずアルゲダス生誕百周年になされた取り組みを概観し（1節）、次いでアルゲダス研究の現在の到達を報告者の関心に沿って整理した上で（2節）、最後に筆者自身の今後のアプローチの方向性として表題にも掲げた、「『すべての血』への回帰」の言わんとするところを明らかにするものである（3節）。

1. アルゲダス生誕百周年のペルー

(1) 一般レベルの取り組み

アルゲダスの生誕百周年に関する一般レベルの取り組みとしては、まずは前年2010年に遡るが、そもそも2011年を「アルゲダス生誕百周年」と命名させるべくアラン・ガルシア大統領（当時）に働きかけようと、各地でさまざまな示威行動がなされた。アルゲダス生誕の地であるアプリアマク県アンダワイラスでのデモは、そうした数々の運動のうちのひとつである⁴。

2011年に入って、こうした一般レベルの取り組みは年間を通じてそれこそ数え切れないくらいあったが、もっとも動員力があつたのは、アルゲダスの誕生日であり首都リマ市の建設日とされる1月18日におこなわれた、市建設四七六周年記念行事中におけるセレモニーであろう⁵。主催はリマ市で、リマ市長のスサナ・ビジャラン（当時）は同セレモニーのなかで、「リマは『すべての血』より成り立っている」（Lima es de “Todas las sangres”）と述べ、ペルーの全体像を描こうとしたアルゲダスの野心的長編小説『すべての血』（*Todas las sangres*, 1964年）のタイトルにしみじくも言及しているが、リマあるいはペルー全体をあらゆる民族的・文化的集積＝「すべての血」と見立てる言説はかなり流通している（紋切り型となっている）ことに、あらかじめ注意を促しておきたい。

(2) アカデミズムの取り組み

アカデミズムにおける取り組みは当然ながら多々あり、国内外の学術機関がじつに多種多様で有意義なシンポジウム・出版をおこなうこととなった。

時系列順に追うならば、これもまずは前年2010年のことになるが、アルゲダス研究の第一人者でもあるアントニオ・コルネホ＝ボラルが米国で創刊した *Revista de Crítica Literaria Latinoamericana* 誌72号が、「José María Arguedas: 100 años de vigencia」（「ホセ・マリーア・アルゲダス——百年の存在感」）と題した特集を組んでいる。なかでも1990年代以降の研究動向をテーマ別に整理したセルヒオ・R・フランコの論文（Franco 2010）は、アルゲダス研究の昨今の見取り図を描くために有益である。

ペルーの主要研究機関も、それぞれ主催する重要な取り組みを見せた。ペルー言語アカデミー（Academia Peruana de la Lengua）は2011年4月に、私立のカトリック大学（Pontificia Universidad Católica del Perú）と国立サン・マルコス大学（Universidad Nacional Mayor de San

Marcos) はそれぞれ6月と7月に、大規模なシンポジウムを主催した⁶。カトリック大学はさらに、アルゲダスの伝記研究者として知られるカルメン・マリーア・ピニージャを中心に、アルゲダスの作品および遺品等を集めた一大企画展 «Arguedas: Perú infinito» (「アルゲダス——大いなるペルー」) を実施し、生誕百周年の一年のあいだ、展示はリマのみならず、アルゲダスゆかりの各地を巡回した⁷。また、ペルーを代表する社会科学・人文科学の総合シンクタンクである IEP (Instituto de Estudios Peruanos, ペルー問題研究所) は, «Arguedas, el Perú y las ciencias sociales: nuevas lecturas» (「アルゲダス, ペルーと社会科学——新たな読解」) と題した論文コンクールを2011年中に実施し, 2012年3月1日に受賞論文報告セミナーを開催した⁸。

生誕百周年の機会にもっとも実現が望まれていた企画として、『全集(文学)』(Arguedas 1983) に続くアルゲダスの『人類学全集』の出版を挙げることができる。残念ながら2011年のうちの刊行は叶わなかったが、翌2012年、ついに刊行されたのは誠に喜ばしいかぎりである(Arguedas 2012)。

2. アルゲダス研究の最前線

(1) 『上の狐と下の狐』研究の深化

アルゲダス研究は、代表作である『深い川』(*Los ríos profundos*, 1958年)等とは明らかに異質な作風の遺作『上の狐と下の狐』(*El zorro de arriba y el zorro de abajo*, 1971年/以下、単に『狐』とする)について、これを「失敗作」・「逸脱」と無視するのではなく、現代ペルー社会を読み解く鍵として注目・評価する方向に1990年代より大きく舵を切り、その流れは今日に至るまで続いている。

たとえば、前出のコルネホ＝ポラールは、『狐』の小説舞台である1960年代の新興漁港チンボーテに群れ集った人々を、その国内移民経験を経て、エスニシティの差異「さえ」も乗り越えてゆく可能性を持つ存在として、「移民としてのメスティサヘ」と位置づけた(Cornejo Polar 1995: 6)。また、ホセ・ギジェルモ・ヌーゲントは、チンボーテでの「出会い」と「コミュニケーション」を通じて、人々がエスニシティへの帰属以上の新たなアイデンティティを築いてゆく可能性に言及していた(Nugent 1991: 132-133)⁹。最近では、同じく前出のフランコが、タイトルをまさに『ホセ・マリーア・アルゲダス、移民の詩学へ向けて』とする編著の「序文」のなかで、「移民運動という脱出線」の重要さを指摘している(Franco 2006: 11)。

筆者自身も、アルゲダスをインディヘニスモではなくメスティサヘの系譜でとらえる立場から『狐』の研究の「深化」の一端を担ってきた(後藤 1994; 1997; 2002; 2009)。その上で、同じく強調されているにしても統合(integración)の要素の強かった『すべての血』のメスティサヘは「収斂するメスティサヘ」(mestizaje convergente)とすることとの対比で、『狐』のそれは多様性に注目する「拡散するメスティサヘ」(mestizaje divergente)に移行したとの問題提起をおこなっている(Goto 2014: 80-81)。しかしながら、「拡散するメスティサヘ」をアルゲダスのたどり着いた到達

点とするとしても、『狐』が未完結の遺作となったこともあり¹⁰、その先にどのような現代の、それも二一世紀に入ったペルー社会像を具体的に構想できるのか、必ずしも明確に見出せずにいたのも事実である。

（2）再注目される『すべての血』

アルゲダス研究の昨今の動向でもうひとつ特筆すべき点があるとすれば、それは『すべての血』への再注目がなされ始めたことである。

『すべての血』は1964年に刊行されたが、その評価については文学と社会科学の関係をめぐる論争があり、その論争は翌1965年、著者を交えた合評会（*mesa redonda*）の場できわめて先鋭的な形で顕在化することとなった¹¹。同合評会の席上で社会学者らにより作品の社会的有効性を否定されたアルゲダスは強いショックを受け、そのことがのちの自殺未遂（1966年）に結びついたと一般に言われている¹²。

しかしながら、現在の視点から前記の合評会の議論を読み直した場合、たとえばメリーサ・ムーアによれば、「アンデス世界についての経験的かつ、かなりの程度直感的な知識に基づいて人類学と文学とを合流させる」アルゲダスの試みは、「作品の社会学的厳密さ」を批判する当時の支配的なアカデミズムの言説とは齟齬をきたしたが、いまとなっては「なんら驚きも反動ももたらすものではない」として、むしろ『すべての血』の側の有効性を認めている（Moore 2006: 268, 269）¹³。

このように、『すべての血』については、それを不当に貶めた1960年代のペルーのアカデミズム批判という形での「再注目」がむしろ際立っているが、では、そうした当時のいわば「歪んだレンズ越し」のアプローチを解除したならば、同作品に対して「再注目」を超えた「再評価」を与えることが可能になるかについては、必ずしも議論が深まっていないとの印象を筆者は受けている。そこで以下に模索されるのが、『狐』の研究の「深化」と『すべての血』への「再注目」を接続する試みである。

3. 「すべての血」への回帰

（1）「統合」としての「収斂するメスティサへ」

アルゲダスの『すべての血』を「ペルーという国を形成するあらゆる種族・階級の抱える問題を包括的に抱えようという大胆な構想を持った長編小説」とありとし、日本で同作品を先駆的に評価したのは山蔭孝夫であった（山蔭 1984: 240）。山蔭はさらに、「スペイン人による征服・植民、さらには国家としての独立を経て現在にまで持ち込まれている二つの種族間の反目を取り除いて共存の道を探る以外、ペルーの統合への道はありえない」と述べ（山蔭 1984: 244）、『すべての血』の持つ「収斂するメスティサへ」の側面も先駆的に言い当てていた。

しかしながら筆者自身は、メスティサへはラテンアメリカ全般においては「多様な社会層を一元化する国民統合のための原理」として歴史的に機能してきたとの前提に立ち、『すべての血』につ

いては、「ペルー社会全体に一元的な価値観を与えている点では、従来の統合的な『メスティサヘ』の枠に収まってしまうもの」として（後藤 1994: 46,51）、「収斂するメスティサヘ」が統合のためのイデオロギーとして作用しうる点をむしろ否定的に評価してきたが、その考えについてはいまま基本的には変わらない。

ただし、「収斂するメスティサヘ」を克服するものとして構想されたのが『狐』における「拡散するメスティサヘ」だったはずであるが、拡散した「その先」に来るべきものが不明瞭なままであるというのは、すでに述べたとおりである。アルゲダス自身もそれが見出せなかったがゆえに、後生にその探求を託す形で「自ら閉じる」（*cerrarse* = 自死する）ことを選択したと考えられている（Arguedas 1983b: 198）。

（2）「拡散するメスティサヘ」から「連帯」へ

アルゲダスが「拡散するメスティサヘ」の「その先」に見出そうとしていたのは、「上（の狐）」（支配者）から一元的に統合＝「収斂」させられてしまうのではない、「下（の狐）」（被支配者）からある種の切実さを伴って形成される「連帯」（*solidaridad*）だったのではないだろうか。

筆者はアルゲダス研究とは別に、科学研究費補助金による共同研究「グローバル化時代における南北アメリカの国家・市民社会・社会運動」（代表者：東京外国語大学教授・鈴木茂）のメンバーとして、2011年9月6日にペルー・リマ市で開催された同名の国際セミナーで報告する機会を得た。同報告では、隣国のボリビア・エクアドルに比して先住民運動・社会運動が「低調」とされるペルーだが、「低調」とされてしまうのはむしろ外的要因（経済的利益の優先、マスメディアによる隠蔽・操作）によるところが大きいと分析したが（後藤 2013）、実際、ペルーの社会運動は地道に展開されており¹⁴、それは現在、とりわけ鉱山開発反対運動に顕著である。そして、「鉱山開発反対運動」とはじつに、『すべての血』において、主人公のデメトリオ・レンドン＝ウィルカを中心として人々がまさしく「連帯」する場なのであった。

しかしながら、『すべての血』が統合的な「収斂するメスティサヘ」を体現する小説だったことは、再三述べてきたとおりである。では、上記のような『すべての血』における「連帯」が、『狐』における「拡散するメスティサヘ」の「その先」に来るべき「連帯」となるためには、どのような「未来に向けた回帰」をするべきだろうか。

『すべての血』における「連帯」は、権力による弾圧という「非日常」において達成されたものである。運動のリーダーであったレンドン＝ウィルカは最終場面で軍によって殺害されるのだが（Arguedas 1983a: 455）、その直前にじつは象徴的な場面がある。それはレンドン＝ウィルカに最後まで付き添っていた2名の先住民男女の死である。彼らは「死を恐れない」として自ら甘んじて銃殺されてゆくのであるが（Arguedas 1983a: 452-455）、死以外に選択肢のないこの「非日常」は「収斂するメスティサヘ」が求める統合の絶対性を示唆していると言える。

ひるがえって、『狐』に萌芽的に予兆される「連帯」はあくまでも「日常」的である。そうした

小説の特徴については、以前にも以下のように指摘したことがある。

全体を通じて一貫したストーリーはなく、また、『すべての血』のレンドン [=ウィルカ（筆者補足。以下同様）] のような中心的な主人公も存在しない。そこに描かれているのは、チンボーテの波止場、歓楽街、製鉄工場、市場、墓場、居住区で繰り広げられる、多様な登場人物の生きざまである。（後藤 1994: 52）

この点を踏まえて、ここでは「居住区」の「日常」に絞ってもう少し具体例を示してみよう。たとえば、「豚飼い」のグレゴリオ・バサラールはアンデス北部の出身である。彼は一時首都リマで暮らしていた時期もあったが、やがてチンボーテに移り住む。チンボーテでは不法占拠した土地に自分の家を建て、居住区の環境を改善してゆく取り組みによって徐々に住民の信頼を勝ち取り、そして住民組織のリーダーになってゆく。とはいえ、グレゴリオはいわゆる活動家然としたところはまったくなく、まさに「日常」のどこにでもいる住民のひとりである。そんなグレゴリオが吐露したのが、以下の独白である。

“Yo, quizás –pensó; ya no podía pensar en quechua- puede ser capaz, en su existencia de mí, no seré ya forastero en este país tierra donde hemos nacido. Primera vez e primera persona colmina ese hazaña defícil en so vida exestencia.” (Arguedads 1983b: 175–176)

（「俺はたぶん」——と、彼〔グレゴリオ〕は考えた。彼はもうケチュア語で考えることはできなくなっていた——「俺っていうものとうまくやっていけそうヨ。俺は俺たちが生まれたこの国という場所で、もうけっしてひとりよそ者になることはないだろう。俺、コノ世でソのムズカシイ挑戦をハジメテやる、ハジメテの人」）¹⁵

この独白にはいくつかポイントがある。ひとつは、グレゴリオは彼の本来の母語である先住民語のケチュア語の代わりにまだまだ不十分なスペイン語を用いているが（日本語訳の不自然さは、彼のスペイン語としての「拙さ」を表現したつもりである）、そこには「喪失感」は漂っておらず、むしろ「積極性」さえ窺えることである。もうひとつは——こちらがより重要なのだが——、「俺は俺たちが生まれたこの国という場所で、もうけっしてひとりよそ者になることはないだろう」という部分で、主語（主体）の人称が「ずれている」点である。「俺」という一人称単数の主体は、「俺たち」という一人称複数の主体が構成する「この国」に必ずしも統合（収斂）されなくても、その存在が「承認」される（よそ者になることはない）。つまり、グレゴリオは「拡散するメスティサへ」をなすひとりとして、その「俺」（個）の資格においてペルーを生きる主体となれるのである。

ただし、「俺」が「俺」に留まるかぎりにおいて、「俺たち」としての「連帯」も成立しえない。『狐』のなかでグレゴリオは、他の居住区の同じく住民リーダーである左官工のセシリオ・ラミレス、お

よびセシリオに弟子入りした元・平和部隊所属の米国人マクスウェルと関係を築いていこうとする (Arguedas 1983b: 161-170)。この「連帯」の可能性の行方は、『狐』が未完に終わったため残念ながら不明である。しかしながら興味深いのは、彼ら三人が会談に選んだ場所が教区のカトリック教会だったということである。垂直的なヒエラルキーを旨とする教会組織はいわば「収斂するメスティサヘ」の象徴であるが、そのような教会の神父らに対して、三人は信者であるにしても、彼らの「日常」の水平的な「連帯」(の可能性)において対等な関係を求めてゆく。そこにこそ、「連帯」に対して「自ら開く」(abrirse) ことをする (Arguedas 1983b: 198), 「拡散するメスティサヘ」の「その先」が見えてくるのである。

むすびにかえて

アルゲダスの『すべての血』における「収斂するメスティサヘ」は、一元的な国民統合を誘発するそのイデオロギー的性向ゆえに、『狐』が提示する多様なアイデンティティの生成・変化に道を開く「拡散するメスティサヘ」によって克服されようとした。

しかしながら、その当の「拡散するメスティサヘ」は、まさに「拡散する」性格がために、人々を必要ときに結びつけるであろう「連帯」のための道徳的根拠を見出しがたくなってしまっていた。『狐』の舞台であるチンボータにおいて、新たなアイデンティティを獲得した人々が「連帯」して社会に対して働きかけてゆくさまを、アルゲダス自身はついで描き切ることはできなかった。一度は乗り越えられたはずの「収斂するメスティサヘ」がふたたび召喚されるとすれば、「非日常」的な状況における「統合」へと後戻りするのではなく、この「連帯」する力の源泉を「日常」において取り戻すためであり、『すべての血』への回帰はそのような意味合いにおいてなされるべきであると、本稿は論じてきた。

今後さらに必要とされるのは、ポール・ギルロイの議論に倣えば (ギルロイ 2006: 12)、そこに「^{ルーツ}根源」(roots) としての「収斂するメスティサヘ」を求めるのではなく、「^{ルーツ}拡散するメスティサヘ」が「その先」において「連帯」に至るためのさまざまな「^{ルーツ}諸経路」(routes) を探る観点から、『すべての血』を再読することではないだろうか。

最後に蛇足ながら、現在の日本では、3.11 の原発過酷事故による放射能汚染問題などまるで存在しないかのように「きずな」という美辞麗句ばかりで復興が語られたり、「中国の脅威」をいたずらに煽ることで無用な国防意識が醸成させられるなど、あたかも「収斂するメスティサヘ」のごとく、為政者から強制される虚構の「連帯」が大手を振ってまかり通っている。そのような状況下で私たちに求められているのは、それぞれの立場のちがひ(「^{ルーツ}拡散するメスティサヘ」)を乗り越えた「連帯」を持続的・日常的に築いていくことにより、刹那的・非日常的な「連帯」はむしろ断ち切ることのできる、真に人間的なつながりであるにちがいない。

[注]

- 1 本稿は、日本ラテンアメリカ学会第33回定期大会（2012年6月2日、中部大学・春日井キャンパス）における口頭報告「ホセ・マリーア・アルゲダス研究の現在——生誕百周年を経て」の内容を、Goto 2014の成果も踏まえて発展させたものである。
- 2 筆者はこの年、早稲田大学より特別研究期間を得て、ペルーの首都リマ市のIEP（Instituto de Estudios Peruanos, ペルー問題研究所）の客員研究員として滞在する機会に恵まれた。ここに記して感謝する。
- 3 歴代の公式名称については、<http://www.deperu.com/calendario/listaanhos.php>（2015年11月11日最終確認〔以下、ネット資料の確認についてはすべて同様〕）を参照されたい。
- 4 ペルーの地方メディアのネットワークであるEnlace Nacional（<http://enlacenacional.com/>）が公開している公式映像を参照されたい（<https://www.youtube.com/watch?v=FVVgRJUKGmY>）。
- 5 リマ市が公開している公式映像を参照されたい（<https://www.youtube.com/watch?v=kFB8RQ42MDY>）。
- 6 三つのシンポジウムの成果は、現在すべて刊行されている（Flores Heredia, et al., eds. 2011; Esparza, et al., eds. 2013; Robles Mendoza, ed. 2011）。
- 7 その後ピニージャは、企画展と同タイトルの生誕百周年記念の豪華装丁本を上梓した（Pinilla 2012）。
- 8 同セミナーにおいて、筆者は記念講演をする機会をいただいた。Cuenca & Pajuelo 2014は同セミナーの成果である。
- 9 そのほか、アルベルト・フローレス＝ガリンドの議論も参照されたい（Flores Galindo 1992）。
- 10 ただし、書き継がれた場合にどのようなストーリーを構想していたかは、作品中に断片的に記されている（Arguedas 1983b: 196-197）。
- 11 この合評会の記録は最初1985年に刊行されたが（Arguedas, et al. 1985）、現在ではより正確に再現されたものを参照することができるようになった（Rochabrún, ed. 2011）。
- 12 ただし、アルゲダスの自殺未遂については、合評会の影響を過大に評価するべきではないとの立場もある（Fernández 2010）。
- 13 ムーアには別途、『すべての血』に特化した著書がある（Moore 2003）。『すべての血』を主たるテーマとした業績としては、その他Espezúa Salomón 2011を参照されたい。
- 14 ペルーの最近の先住民運動・社会運動については、Bebbington, et al. 2011; Flores, et al. 2011; 村上 2009; 岡田 2009; Pajuelo 2007を参照されたい。
- 15 この箇所は筆者自身も何度となく引用しているが（Goto 2014: 83; 後藤 2009: 179）、ペルーの政治学者フリオ・コトレルが彼の金字塔的著『ペルーにおける階級・国家・ネーション』のエピグラフとして使用したことであまねく知られることとなった（Cotler 1988: 9）。

[文献一覧]

- Arguedas, José María. 1983. *Obras completas*. 5 tomos. Lima: Editorial Horizonte.
- 1983a. *Todas las sangres* (1964). *Obras completas*, IV.
- 1983b. *El zorro de arriba y el zorro de abajo* (1971). *Obras completas*, V.
- . 2012. *Obra antropológica*. 7 tomos. Lima: Editorial Horizonte.
- Arguedas, José María, et al. 1985. *¿He vivido en vano?: mesa redonda sobre Todas las sangres (23 de junio de 1965)*. Lima: IEP.
- Bebbington, Anthony, et al. 2011. *Los movimientos sociales y la política de la pobreza en el Perú*. Lima: IEP/ CEPES/ GPC.
- Cornejo Polar, Antonio. 1995. “Condición migrante y representatividad social: el caso de Arguedas”. Maruja Martínez, Nelson Manrique, eds., *Amor y fuego: José María Arguedas, 25 años después*. Lima: CEPES/ DESCO/ SUR Casa de Estudios del Socialismo, pp. 3-14.
- Cotler, Julio. 1988 [1978]. *Clases, Estado y nación en el Perú*. Lima: IEP.
- Cuenca, Ricardo, Ramón Pajuelo, eds. 2014. *Arguedas, el Perú y las ciencias sociales: nuevas lecturas*. Lima: IEP.
- Esparza, Cecilia, et al., eds. 2013. *Arguedas: la dinámica de los encuentros culturales*. 3 tomos. Lima: PUCP.
- Espezúa Salmón, Dorian. 2011. *Todas las sangres en debate: científicos sociales versus críticos literarios*. Lima: Magreb Producciones.

- Fernández, Christian. 2010. "Arguedas y la crítica en la encrucijada: la mesa del poder o el poder de la mesa sobre *Todas las sangres*". *Revista de Crítica Literaria Latinoamericana*, (72), pp. 299-316.
- Flores, Diana, et al. 2011. *Nuevas miradas al Perú contemporáneo: movimientos sociales, identidades y memoria*. Lima: Programa Democracia y Transformación Global.
- Flores Galindo, Alberto. 1992. *Dos ensayos sobre José María Arguedas*. Lima: SUR Casa de Estudios del Socialismo.
- Flores Heredia, Gladys, et al., eds. 2011. *Arguedas centenario: actas del Congreso Internacional José María Arguedas - vida y obra, 1911-1969 (18 al 20 de abril de 2011)*. Lima: Academia Peruana de la Lengua/ Facultad de Letras y Ciencias Humanas, UNMSM/ Editorial San Marcos.
- Franco, Sergio R. 2006. "Prólogo". Franco, ed. *José María Arguedas: hacia una poética migrante*. Pittsburgh: Instituto Internacional de Literatura Iberoamericana, pp. 9-20.
- . 2010. "Diez líneas de fuerza de la crítica arguediana". *Revista de Crítica Literaria Latinoamericana*, (72), pp. 341-356.
- ギルロイ, ポール 2006. 『ブラック・アトランティック——近代性と二重性』(上野俊哉ほか訳) 月曜社
- Goto, Yusuke. 2014. "Arguedas, visto desde la otra orilla del Pacífico: de 'otras' lecturas a las nuevas 'esperanzadoras'". Cuenca & Pajuelo, eds. *Arguedas, el Perú y las ciencias sociales*, pp. 73-94.
- 後藤雄介 1994. 「インディヘニスモから『メスティサヘ』へ——ホセ・マリーア・アルゲダスのペルー社会像」『イベロアメリカ研究』(上智大学イベロアメリカ研究所) 16 巻 1 号, 45-58 頁
- . 1997. 「ラテンアメリカ『混血』論研究序説——統合と多元の狭間のくメスティサヘ」一橋大学大学院社会学研究科 1996 年度博士課程単位修得論文(未公開/博士学位論文ではない)
- . 2002. 「アルゲダス研究の現在性——ポストコロニアルの視点から」『学術研究——外国語・外国文学編』(早稲田大学教育学部) 50 号, 45-58 頁
- . 2009. 「ペルーの多言語・多文化世界——『あれかこれか』の選択を越えて」畑恵子・山崎真次編『ラテンアメリカ世界のことばと文化』<早稲田大学国際言語文化研究所・世界のことばと文化シリーズ>成文堂, 172-182 頁
- . 2013. 「社会運動の(不)可能性に関する考察——現代ペルーの事例を中心に」『学術研究——人文科学・社会科学編』(早稲田大学教育・総合科学学術院) 61 号, 293-300 頁
- Moore, Melisa 2003. *En la encrucijada: las ciencias sociales y la novela en el Perú (lecturas paralelas de Todas las sangres)*. Lima: UNMSM.
- . 2006. "Encuentros y desencuentros de la novela y las ciencias sociales en el Perú: repensando *Todas las sangres* de José María Arguedas". Franco, ed. *José María Arguedas: hacia una poética migrante*, pp. 267-284.
- 村上勇介 2009. 「中央アンデス三カ国の政党——制度化の視点からの比較研究」村上・遅野井茂雄編『現代アンデス諸国の政治変動——ガバナビリティの模索』明石書店, 87-136 頁
- Nugent, José Guillermo. 1991. *El conflicto de las sensibilidades: propuesta para una interpretación del siglo XX peruano*. Lima: Instituto Bartolomé de las Casas.
- 岡田勇 2009. 「中央アンデス諸国の先住民運動——アイデンティティによる組織化の比較」村上・遅野井編『現代アンデス諸国の政治変動』, 137-160 頁
- Pajuelo, Ramón 2007. *Reinventando comunidades imaginadas: movimientos indígenas, nación y procesos sociopolíticos en los países centroandinos*. Lima: IEP/ IFEA.
- Pinilla, Carmen María. 2011. *Arguedas: Perú infinito*. Cusco: Dirección Regional de Cultura Cusco, Ministerio de Cultura.
- Robles Mendoza, Ramón, ed. 2011. *Memoria y homenaje a José María Arguedas: centenario de su nacimiento (1911-2011)*. Lima: UNMSM, Fondo Editorial.
- Rochabrún, Guillermo, ed. 2011. *¿He vivido en vano?: Mesa Redonda sobre «Todas las sangres» del 23 de junio de 1965*. Lima: IEP/ PUCP.
- 山藤孝夫 1984. 「インディヘニスモの影」野谷文昭・旦敬介編『ラテンアメリカ文学案内』冬樹社, 230-254 頁